

書名：『善と悪の経済学』

著者：トーマス・セドラチェク
訳者：村井章子
出版社：東洋経済新報社
出版年：2015年6月11日
総ページ数：576頁

評者：佐々木 公 明
(本学名誉教授)

本書の著者はチェコ共和国の経済学者で、現在同国最大の商業銀行のチーフストラテジストであり、大学在学中の24歳で大統領の経済アドバイザーを務めたとされる。本書は2012年にドイツのベスト経済学賞を受賞しており、刊行後15の言語に翻訳されている。本書の目的は「社会科学の盟主」と言われる現代の主流派経済学（所謂「現代経済学」と呼ばれ、殆どの経済学部あるいは経済学科で教えられている経済学を指す。以後“現代の経済学”と称す）が持つ「(人間社会で起きている)すべてを説明できる」という野望を徹底的に批判し、現代の経済学は「人間と言うものをどう捉えるか」を改めて考え直すべきであり、そのために古代の思想家の考えを真摯に受け止めるべきであると主張する。著者が現代の経済学を批判する論点を纏めると次の2点になる。第1に「現代の経済学が善悪を判断する倫理の問題を切り離している」こと。第2に「現代の経済学は何をするときでも効用の最大化を図るアプローチをとる」こと。これら二つの論点は全く独立ではなく、例えば本書10章で論じているように「倫理を重んじて行動したいなら、自己の効用を増やしたいという衝動に逆らって行動しなければならない」。だから、効用最大化アプローチを採用するためには倫理を切り離す必要があるのである。また本書5章で論述しているように、現代の経済学では、周到に選ばれた仮定から出発し、既に仮定の中に含まれていた結論に当然ながら不可避免的に到達する仕掛けをもっている。したがって、倫理の問題を捨象すれば、非現実的ではあるが、しかし美しい結論に導く仮定をあまり躊躇しないで置くことができる。いずれにしる現代の経済学のこの2点に対する批判は本書が初めてではないが、著者は現代の経済学が数学を補助手段ではなく“主要言語”としていることを「メタ数学」と皮肉り、「メタ経済学」が重要であると指摘する。「経済学は人間の関係性を研究する学問であり、人間の経済的行動については、精密な数学モデルから学べるのと少なくとも同じくらい多くの知恵を、哲学、神話、宗教、詩から学ぶことができる」(序章)と論じ、ギルガメシュ叙事詩(1章)、旧約聖書(2章)、ギリシャ哲学(3章)、キリスト教(4章)の古代思想において、「経済」あるいは「経済学」をどのように考えていたかを丁寧にひも解き、現代の経済学及び経済学者に反省を促すのである。本書は15章から成るが、この4つの章で扱われている思想は通常の本や論文にはほとんど表れないので、それぞれを短く紹介するのは有益であろう。

ギルガメシュ叙事詩は今から4000年以上も前に作られた。人類最古の文学作品で、メソポタミアから出土した。ギルガメシュはウルクという都市の支配者であり、人間を超越した存在で三分の二は神、三分の一は人間である。しかし、城壁建設のためにギルガメシュが人民に働いた横暴を罰するために神は凶暴なエンキドゥを創造して送り込む。やがて二人は互いを認め、無二の親友となる。ここに描かれているのは友情の力を示す美しい物語で、友情は制度を

変え（あるいは破壊し）人間を変える力を持っていることを示唆しているのである。

旧約聖書時代のユダヤ人は、今日の欧米文化と経済システムの形成に重要な役割を果たしたにも関わらず、経済思想の教科書や経済書の中で、この点に十分な紙面を割いたものは少ない。旧約聖書は驚くほどよくできた社会経済規則を定めている。ヘブライの教えでは、個人の効用とは別に、社会全体で効用を最大化するという概念が示されているのである。いくつかの例を示すと：

- ① 安息年と大恩赦の年（レビ記25章）：土地は6年使ったら7年目は休む。土地に休息を与えるためである。さらに49年ごと、つまり50年目には土地は元の持ち主に返還される。50年は概ね当時の人間の寿命に一致し、親が失敗したとしてもその子供たちには負債は継がれないことになる。
- ② 落穂拾いの権利（レビ記23：22）：貧しい人々に最低限の生活手段を保障する。
- ③ 十分の一税（申命記26：12－15）：収穫の最初の実りは主のものである。ユダヤ教では慈善は善意の表れでなく、むしろ責任と見なされていた。
- ④ セーフティネット：モーセの律法によれば、一族は大黒柱を失った寡婦や孤児の面倒を見なければならない。旧約聖書は寡婦と孤児だけでなく、移民も社会的保護の対象とした。イスラエルの人々は自分たちもエジプトでは奴隷だったことを忘れてはならないとされた。

旧約聖書は「安息の経済学」を示唆している。7日目は休めという安息日の命令には、人間は働くためにだけ創造されたのではないというメッセージが込められている。多くの経済思想史の教科書はアリストテレスから始まる。アリストテレスは、「どうすれば幸福な人生を送れるか」、「思い通りの人生を送るとは何を意味するか」を論じた。

新約聖書にはイエスにまつわる寓話が30ほどあるが、そのうちなんと19が経済あるいは社会と関係があるという。失くした銀貨の寓話（ルカ15：8－10）、銀貨を銀行に預けず地中に埋めておいた愚かな従者をしかる寓話（マタイ25：27）、不正な管理人の寓話（ルカ16：5－12）、ぶどう園の労働者の寓話（マタイ20：8）、二人の債務者の寓話（ルカ7：41－43）、愚かな金持ちの寓話（ルカ12：16－21）等である。現代の経済学では贈与はアノマリー（異常）の一つであり、既存のモデルでは説明しがたい。しかし、対価が支払われない贈与はキリスト教の「救済」における基本原理である。現代の経済学の「囚人のジレンマ」のゲームでは、どちらも望まない結果へと当事者を突き進ませる。しかし、各人がキリスト教の「隣人愛」の教えに従って行動すれば、囚人のジレンマは起こり得ないのである。

以上みたように、古代の経済学は人間の生き方を教えるもので、当然倫理は重要な核をなしていた。この方法論、アプローチが大きく変化したのは、著者によればデカルト以降ということになる。デカルト以降、人間は感情ではなく論理的な理性によって定義されるようになり、知覚による個別性は消滅し、すべての人にとって等しい普遍的な客観的合理性に置き換えられたとする。計算できないもの、数字で代用できないものは、現実でなく錯覚にすぎないと扱われるようになった。かくして、数式が真理を表す理想となる。

本書でも“経済学の父”と呼ばれるアダム・スミスを論じることは中心的テーマの一つである（7章）。その場合、市場の「見えざる手」を巡る論考が重要であるが、その概念をスミスよりも早く思いついた人物として、バーナード・マンデヴィルに一つの章（6章）を割り当てているのも本書の特徴となっている。現在知られている形での見えざる手を思いついたのはマ

マンデヴィルであって、アダム・スミスだとする今日の見方は誤りである、と著者は主張する。マンデヴィルはもともとオランダで医者をしていたが、「私悪すなわち公益」と言う副題の『蜂の寓話』（1714；1723）で一躍有名になる。悪徳の栄える蜂社会は繁栄していた。蜂たちは嘘のない正義の社会の方が良いと主張し、蜂の王ジュピターは蜂を正直な高潔な生き物に変えてやる。しかし、誰も居酒屋で酒を飲まない、窓枠もドア飾りもいらないので鍛冶屋は少数で良いので、多くの蜂が失業した。哀れ大勢の蜂は死に絶え、この社会は消滅してしまう。この寓話を通して、マンデヴィルは個人の悪は公益に資することを示したのである。つまり「見えざる手」によって市場が悪徳を徳に変えるのである。

古典的な利己主義経済学の枠組みを確立したのはアダム・スミスだと考える、一般的な経済思想史しか知らない人は、『道徳感情論』の冒頭の文章にひどく驚くことだろう。倫理の問題を経済学を含めるべきであり、むしろこれが経済学の重要な問題であるとしたことが、スミスの残した貴重な遺産である。彼の経済学への最大の貢献は倫理に関することなのである。このスミスの遺産にも関わらず、市場の「見えざる手」には、利己主義を全体の利益に転換あるいは変化させる能力があると解釈されてきた。そして、この考え方が、現代の経済学における倫理に対する無関心に繋がっていると著者は考えている（11章）。

倫理を切り離れた現代の経済学では、人間は何をするときでも効用の最大化を図ると考える。効用の定義が拡大されて、睡眠も子どもとおしゃべりと言ったものも含むようになるのである。つまり、効用は効用を増やす活動を通じて得られるものという、トートロジーに行きつく。そして、人間はどんな活動からも効用を得ようとするのだから、「人間はしたいことをする」が導かれる。子どもを育てるのも効用を得るため。だから、母親が子育てを放棄したら、放棄することに効用を見出したから放棄したのだと言わざるを得ない。経済学がもうこれ以上善悪に無知であることは出来ない。つまり、苦痛、非効率、貧困、無知、社会的不平等などは悪いとされ、科学の力で取り除くべきなのである。本書の結論は、「善悪の問題を経済学から切り離すことは出来ない。経済学から倫理を取り去ることは出来ない」ことである。

本書の“凄い”のは、所謂「経済学」の文献だけではなく、むしろそれをはるかに超えて神話、旧約聖書、新約聖書、哲学、歴史の文献をその分野の専門家と同じレベルで学び、思考した“桁外れの教養”に裏打ちされていることである。ただ一つだけ、本書に投げかける疑問は、現代の経済学に対して本書と同じ視点での批判を持つアマルティア・センに多くを言及せず、経済学が倫理を切り離していることに関して、5章の一つの脚注で触れているにすぎず、彼の数多くの著作の内『経済学の再生』だけを参考文献に挙げていることである。センは例えば、「これまでの経済理論は、そのような単一の万能の選好順序の後光を背負った合理的な愚か者（rational fool）に占領され続けてきたのである」（『合理的な愚か者』）と効用最大化アプローチを批判している。そして、センはコミットメント（commitment）の概念を導入し、「コミットメントは、選択された選択肢はそれを選んだ人にとって他の選択肢よりも望ましいはずだという根本的な想定を破壊する」（『合理的な愚か者』）と論じているのである。

ともあれ、本書は現代の経済学者に“誠実に勉強する”ことを要請していると言える。